

諺語辭書譬喻盡に就いて

岡田 希雄

「（たづね）譬喻盡」と云ふ八巻の書がある。書名は「（たづね）譬喻盡（しん）古語名數」ともあるが、名數は至つて少く、主としてタトヘ即ち諺語を蒐集したもので、諺語以外にも諺語に類したやうな語句をかなり難版に収めて居る。川瀬氏で東井と云ふ號を有する一條家の公家侍が、天明寛政の頃に編述したもので、以呂波類聚であるから諺語辭書と云ふ可きである。八巻もあるので、諺語大辭典に漏れて居る諺も收めて居り注意するに足る。自分の見る事出来このは著者自筆本であるが、轉寫本の有無は知らぬ。恐らくは無いのであるまいか。よしや轉寫本があるにしてもさうざらに有る譯でもあるまいから、希觀書である事は確かだと思ふ。殊に自分の見る本は著者の自筆本である點で一好珍重すべきであらう。

諺語辭書譬喻盡に就いて（岡田）

學界にも未だ知られては居ないものと考へるから、紹介を試みるのである。

二

先づ體裁を云ふと、縦五寸七分、横三寸九分餘の大きさの袋綴冊子本で八冊、仁義禮智信云々で卷の順序が次第せられて居るらしく、其れらの文字は題箋の眞下に表紙に直接に書いてあるが、義・智・信以外は表紙の手擦れが餘りにも甚だしいために全く不明と成つて居る。此のほか、表紙には、題箋以外に、左肩には一・二・三・四・五・六・七・八と云ふ風に卷序を示す數字が完全に存し右肩には「白や之部至て之部」と云ふ風に、其の卷の内容を示す説明（但し第七卷は全卷がのし部であるから「し之部」とあるのみ）も存するが、是れは完全なものは殆んど無くて大抵は下半の部分が手擦で不明と成つて居る。中央に貼りつけてある題箋の用紙は黄地に銀でも塗つてあつたらしくて、其の銀が焦けてしまつて居るものだが、其れには「（或は）嘯盡」と書いてある。何れも濃い墨で肉太の文字である。裏書皮の外側には甚だしく手擦した上に「下村玉廣」と書いた比較的新しい押紙が、各冊に貼りつけてある、所藏者の名であるらしい書皮の手擦が甚だしいので、今は保護用に新しい書皮が被せてある。が此の新書皮を添へる時に、上部と綴目の所とを裁斷し去つた爲め、頭註の文字の切れ失せてしまつたもの、あるのは惜しい。書物の内題は第一卷の白序の前、及び本文の始まる所、第八卷の最後の白跋の前とに「（或は）嘯盡 （或は）古語名數」と書いてあり、第八卷のを除くと、此の通りの振假名付きである。

各卷の内容は左の如くである。

第一卷 (仁ならむ) 白い之部至と之部

第二卷 義 白ち之部至か之部 (を「あり」)

第三卷 (禮ならむ) 白よ之部至な之部

第四卷 智 白ら之部至く之部 (み「お」あり)

第五卷 信 白や之部至て之部 (え「あり」)

第六卷 (不明) 白あ之部至み之部

第七卷 (不明) し之部

第八卷 (不明) 白多之部至す之部 (ふ「あり」)

すべて以呂波四十七部全部存するが、決して正しい假名遣により分類して居るのでは無い。

本書は、「い」「なら」「い」の部に、後で増補できるやうに餘分の紙を相當に添へて製本し、其の後其の餘分の白紙に増補を書き込み行き、餘分の紙を全部使用し盡すと、今度は書き込む可き紙を、綴ち込む代りに糊付けで次第に添へて行き、其れに書き込んで行つたもので、「し」之部の如きは此の糊付けによる増補が三十四丁も存する。「こ」の部は十七丁、「た」の部は十四丁である。或る程度に蒐集せられた時に一旦清書して増補に備へて餘分の紙を加へて製本し、其の後次第に書き足して行き、綴ち込んであるだけの紙で足らなくなつたので次第に糊付けして補ひ行き、何年もかゝつて現在のものに仕上げて行つた事情が明らかに判つて興味がある。文字は全部一筆と見られる。著者は何度にもわたつて増補して居るのだが各部の末の増補の部分にも他筆が混じて居るとは見られない。文字は清書の部と、増補の部の末の方とでは、無謬謹嚴の度に於て相違があるが、大體至つて克明な筆で、漢字は楷體が主で行體が少い。し

かし文字其の物は甚だ拙い。穂尖のちびつた筆で書いた文字である。漢字には殆んど全部にわたり添假名が存する。細註の文字に至りては擴大鏡によらなければ讀みづらいものもある。しかも几帳面に書いてある。書き損じた場合でも墨で塗りつぶす事はせずに、必ず胡粉を塗り、其の上へ書き直して居る。叮嚀な事である。とにかく本書の文字は克明其のものであると云ひ得る。朱筆もところ／＼に存するがやはり同一筆である。

本書で興味を引くのは其の挿繪であらう。即ち各冊に二頁續き見通しの繪が三箇所四箇所存する。例へば第一冊の部には、二月の京千本釋迦堂大報恩寺の調讀道教經會に參詣する都人士を畫き、其の中で綿帽子を着た中年婦人を特に大きく畫き居り、「道教經へ參るより窓の下へ參れ」と云ふ語が書いてある（本文の解釋には「寒故也」とある、寒い時分にわざ／＼信心で外出するよりは、自宅の竈で焚火して溫り居る方がましであるの義であらう）。ハの部には「花より國子」の説明畫として、咲く櫻、緑の柳をこきまぜた庭の景色を縁側より眺める王朝の所謂十二重土廊を描いて居る。但し几帳の蔭には、三寶に戴せた黄金の煙管、灰吹、火入れなどがあるのは滑稽である。トの部は「燈臺元關し」の説明だから、几帳ある部屋の中に燈臺が描いてある、妻戸、明り障子、簾、格子などすべて王朝式であるが、几帳の端から見えて居るのは海では無くて、後世の綿の入つたふくらかな蒲團であるやうだ。斯う云ふ風な繪が各冊に三四圖存するのだ。何れも極彩色で畫風は先づ京ではお馴染のおだやかな西川祐信風であり、（秋里薩島の名著都名所圖會に見えろ風俗畫の畫風であると云つても可い）決して江戸繪風では無い。克明に極彩色してあるのだが薄い粗末な紙に墨も引かないのだから、繪の具がにじみ出たりして居て、見るからに拙い畫き方である。しかし繪其のものは拙いとは云ふ可きでは無く、宛ち巧みと云ふ可きだらう。是れ程念入りに描くのであるならば、最初から

どうさ引いた上で描いたら可さうなものをと、もどかしく感ずる。

用紙は清書の部分にしても良紙とは云へないから、増補の糊付けの部分などは一層粗末な紙で、寸法の足らぬものなども使はれて居る。全體が薄手の粗末な紙だが、それでも八冊を重ねて力を加へて壓へつけて計つて見ても、四寸の厚さはあるのだから総紙數がかなりある事は判る。數へて見ると、

第一冊 一二三丁	第二冊 八五丁	第三冊 八七丁	第四冊 八三丁
第五冊 一一一丁	第六冊 一一一丁	第七冊 七五丁	第八冊 六六丁

總計七四一丁存するのである。

本文も序文も一頁十行づゝである。

三

本書には自序自跋が存する。本書の性質を物語るものとしては、是れ位有用のものは無い。自序は左の通りである。

序

大父登^{（一）}慈^{（二）}親^{（三）}通^{（四）}平^{（五）}尼^{（六）}世^{（七）}尊^{（八）}人^{（九）}滅^{（一〇）}。今年丙午の歲^{（一一）}○丙午の二字の左下に小さく朱筆に至りて。二千七百三十五年に及べり。○三十五の
にそれ^{（一二）}く四^{（一三）}・十^{（一四）}・五^{（一五）}と書いてある。後述す。朱筆で小さく書いてある。佛在世^{（一六）}滿八十を定命とし。百年に一歲宛減じみれば。今年丙午に至りて。人間の定命五十二歲六分五厘なり。これより上生延はる人は。長壽といひて日出度こと。此上有べからざるか。もろこしの東瑠居士の時代にも。長命は珍しきことなや。七十古來希なりと。詩にも作りをかれたり。ましてや今の世に於てをや。その上富貴にして。身も健ならんは。それこそ^{（一七）}に^{（一八）}もいふ^{（一九）}果に^{（二〇）}鐵^{（二一）}餘^{（二二）}松^{（二三）}なるべけれ。しかれども^{（二四）}福壽は^{（二五）}家^{（二六）}れぬものなり。されは^{（二七）}大聖^{（二八）}尊^{（二九）}尊^{（三〇）}世に^{（三一）}在^{（三二）}すとき^{（三三）}日^{（三四）}ひけるは。刻

診諸辭書體略に就いて（岡田）

銅山の四洲の中。南緯部州南國浮提ともいへり。人壽百歳として。しかも老少不定。この衆生を濟度し。成佛ならしめんには譬喩を以て。速に會得させしめんことを計策し給ひ。就中法華經には譬喩品あり。華嚴譬喩品あり。化城喻品あり。そのほか五時八教の。一代說法し給ふ一切經。一千一百二十四部而五千四十八卷の中に。譬喩を以て示し教へ給ふこと。揭て數えがたし。亦是月氏國のみにあらず。毘盧國にも世々の賢臣。譬喩を以て諷諭し。實道に入らしめ給ふこと少なからず。我日本も亦又然なり。別て卑語といへども都歸に傳え。俚言に暗灸し常談說話に。是を引據し用語せること。十語の中に必二三語あり。されば予これを聞傳え聞書し。をけること年あり。今也これを清書し一部八卷となす。閱し給ふの暇等。實はこれに増補し給はんことを穴賢々々

告

天明六丙午年八月念五爲華薩東武者小路梅屋坊寓會松葉軒採筆 東井一號春江謹序

松葉軒

東井一號
春江

添假名や假名遣は原本の儘だが、添假名は少し省いた。印は何れも正方形陽刻朱印で下の方が少し小さい。次ぎに自跋は左の如くである。

不_レ言者増_レ可_レ言之喻雖_レ有_レ之詞者是花也_レ有_レ花者有_レ子有_レ子者時_レ之期出_レ芽爲_レ繁茂_レ滿_レ山榮_レ千歲萬歲無朽矣昔大明七丁未年秋八月望京郡東武者小路梅屋坊寓居於_レ松葉軒採筆

一行十二字で六行、反點や添假名は本のまゝである。「川瀬氏」と云ふ圓形陽刻朱印と、「久□之印」と云ふ方形陰刻朱印とが捺してある。

右の序跋により本書の著者、著述の動機理由、著述の大體の年代等は明白である。卷數が八卷であるのは、法華經

八巻によつたものらしい。

四

さて著者や年代の事などにつき、や、詳しく考察する。便宜上まづ著述年代について考へて見る。本書は著者が長年月の閒心掛けて蒐集しておいたものを、清書して序文を加へたのが天明六年八月二十五日であり、跋を加へたのは翌七年八月十五日で、其の間滿一年かゝつて居る。恐らくは天明六年八月末頃より清書をはじめ、其れが完成したのが一年後の天明七年八月十五日だと云ふのであらう。(因みに云ふ、其の部の「清水の邊」から来たと思ひて一の説明は、清居り、其の笠指に「西國卅三所願燈、越後國住人、同行十一人、天明四年三月」と書いてあるの、此の約は天明四年三月に描かれたものであらう、其の頃にすでに清書にかゝつて居たのであらうと云ふ事も考へられさうだが、しかし、さうまで考へる必要はあるまいと思ふ。)だが既に述べたやうに此の後著者は次第に書き込み行き、紙が足らなくなると紙を足してまで増補して行つたのであり、其の増補は寛政の末年十一年頃までは行はれたらしい。其の経過を書中の記事で窺ふと左の如くである。但し天明八年のものは省略する。

寛政二年

○「十二門」の頭註に、時哉、天明八戊申正月晦日京大火、内裡炎上、寛政二年十一月廿二日内裡御遷幸、天明八年正月の京大火は「火事舞」、「皇宮されば火災あらんと案する」「六角堂の鐘向の町人家の裏にあり」の條其の他などにも見える。

○アの韻秋にわびて枯にし物を今更に何驚かす我の上風の註に、此の歌の作者の事が寛政年間出版近世時人傳四十九に見えと云つて居るが、時人傳正編四巻は寛政二年庚戌春三月他序で同年八月の刊行である。

寛政三年

諺語辭書管喉嚨に就いて(岡田)

○「の」多結や大根葉流る龍川「マ」の「萬歳や智恵無き顔と見えて吉」の條などに、大和名所圖會を引いて居るが、同書は寛政三年辛亥五月の刊行である。

寛政六年

○「陽月（ひがしづき）の事は大約三十二三箇月（さんじふさんさんかづつき）日に是を設く」の註に「閏月（うるしづき）小（こ） 洪（ほう）寛政六（ろく）年閏十一月（うるしじゅういちがつ）大吉（きうき）諸相違（しよさう）」

○「閏月（うるしづき）は小にする法なり」然寛政六（ろく）年十一月閏十一月（うるしじゅういちがつ）大如何、洪（ほう）依（よ）時不（とき）當（あた）乎（や）……」

○「此度」の條に「寛政六甲寅年閏霜月（うるししもづき）下旬、京諸司代堀田相模守殿寄附、御當職關白一條殿ヨリ御儀別三組盡給之……將軍家へハ十二月（じふにがつ）給……」一條殿は後にも説くが、著者の主人である。

寛政七年

○「三元」の條の頭註に「今年寛政七（しち）年（ねん）至（いた）テ」

寛政八年

○「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」の註に「金剛經委金剛般若波羅密經出之小册一卷寛政八丙辰八月八日聞之」

○「山の雪で足突く」の條の註には紙に破損があつて明らかでは無いが「寛政八丙辰十一月廿六日五百五十回」○「鑑國師之號南○以下」とある、寛政八年が五百五十回忌と云ふと寛元頃に示寂した高僧らしいが、何人であるか不明である。

寛政九年

○「三第といふこと時花（ときはな）丁巳冬（ていしふふゆふ）」

○「梓（しづみ）は託人に功者あり」の頭註に「又縣御子庭訓出之、別○又釋迦小師（しよし）トテ國々一村添有之者也、攝州天王寺邊、和州初瀬邊、信州善光寺邊、寛政九己辰上京町ヤヲ○ル、秋大阪ト云云」とある。擴大鏡を要する程度（ていど）の細字で、且つ墨色淡き故紙めな
い字も出来るのである。

○「親上人四句文」の註に四句文をあげ、以上洛寺町眉山寺什撰……此度開帳……寛政九、已三月四月群衆云云」
寛政十年

○「大佛」の條に「京大佛、大正十四年縣臣大岡秀吉公建立、慶長十五年內大臣秀頼公再興、時哉、寛政十年七月二日、潮雷火而三王門、回廊悉燒滅、惜哉、京名物失」

○「關所石」の註に「上野郡須野殺生石々々也、京一條上新町東側、清物……今山科氏持爲「内石」此石寛政十戊午十月、川西新河荒神買求云云」

○「恥かしや」に見る來て居る心に「攝州國新四下七十二、和光寺、下湖春」とある。攝津名所圖會の刊行年月は第六卷の尾に「寛政八丙辰年九月、四冊出来、寛政十戊午年九月、八冊出来」とあるが、刊行順序は卷の次第に據らずして、九卷十二冊の中、七卷以下の三卷四冊を寛政八年に出し、六卷までの八冊を寛政十年九月に出したものと見られるから、第四卷の下冊などはむろん十年刊行の分である。

寛政十一年

○「時知らぬ鐘も有かは夜となく」とも分かぬ風のまに「笑の眉開けし花は梅か桃か」の註に「郡林泉」の妙心寺條を引いて居るが、秋里離島の郡林泉名勝圖會は寛政十一、最仲夏の自跋があり其の月の刊行である。

以上の如くであるが、なほ「二十餘回を經る」の註に「釋尊入滅後、年數凡高也、實此序演至今年天明六丙午年二千七百三十五年成也」とある。天明六云々の左に「又寛政十一己未年」、二千七百三十五年の所に三十五の左に「四十八」と夫れ々々朱記し居り又序文のはじめの今年丙午の所に「己未」、二千七百三十五年の所に四十五と朱記して居る。云ふまでも無く是れらは寛政十一年に朱記を加へたもので、其の頃まで増補を行つて居た事を物語るものである（序の四十五は四十八の誤記、三十五の五に引きずられたのであらう）。要するに、天明六年八月から清書して、翌七年八月に跋

を加へ、其の後、寛政十一年末頃までは増補をして行つたものと見える。寛政以後の年號が見えず、其の寛政は十三年の二月五日で享和と改まつて居るから、先づ「寛政十一・二年頃までの増補を考へて可いのであらう。しかしして其の清書以後の増補が夥しいものであつた事は、シの部では豫め増補用に繰り込んであつた用紙それが何枚であつたかから明言しかねるの後へ糊付けで加へたのが三十四丁の多きに及んで居る事で、大體が察知出来る筈である。

五

著者は自序跋によると、京都東武者小路梅屋坊の松葉軒に寓居する「東井」二號「春江」と云ふ人であつたのだが、此の署名を見るに俳人又は俳人風の人であつたと考へられる。しかして、此の人の事が他書に所見あるか何うかは知らず、檢しても居ないが、本書中に散見する断片的記事により、著者の姿は幾分窺はれるのである。其これらの記事を擧げる。著者は俳諧を職業とする人では無かつた。

先づカの部に「かゝる童詞あり、堺の甲斐の町の角屋の加智田の上様の片頬を、蚊屋越に蚊が食て、痒さに搔たら痒病に早成て、海乘坊の買藥を早傳たら早治つた云々」と云ふのがあるが、此の雙行註に

予幼少比聞登然今及奉仕一條御殿毎青陽有年禮參殿者名號堺海乘坊住所答曰洛西圓明寺村今也此村九條殿御領分也其後此著於當御殿不見名目子長國天神參詣刻、山崎成恩寺精舍經過圓明寺村之土民答曰海乘坊當村居住服醫者而其藥名云「珊瑚琥珀散」眼藥也、今也後而子孫出京不知云子思其醫捨業乎、惜哉、折角欲尋西里不達本意止按元圓明寺村當御殿御元祖攝政關白實經公御法名圓明寺行雄、御廟山寺在之乎、天明三癸卯七月十八日五百回御法事有於東福寺常樂庵子供奉御成不思誠哉故鄉增爲名氏其先從泉州擧出者乎、啻以眞邇之緣有之者也、雖然爲故人其子孫奉給國家家

嬰也、今及六十年此事取失無二見聞惜哉

本書中には堺に関する記事が甚だ多い。

堺市之町西六間筋は紅絹裏

界新院町宿院住吉御旅町飯ヒ堀周の石の玉埴員四十八本あり……

×多羅萬酒落齋及はゆことをいふ。堀園圃(×の所へは竹の下に塞を書いた字が入る)

酒落齋(註)以下社稷齋及ばぬことをいへり、元泉州學師藤井元徳人學、仙術未熟而得之思土屋上、飛行住擬拔、腰古事也。

論語を要論に就いて(岡田)

堺の三ツ櫓京の×名物なり（×の所へは影の下に會を書いた字が入る）

荳瓜や茄子や被大角豆ハリヤリヤ 堺盆踊歌

律反の紫き都の巷だに降れば淋しき五月雨の比 泉州堺大安寺春山長老詠出

空路の始は泉州堺千利休始て製す 以下雪日閑庭跡不付工夫也、草履、蓑皮、付用

堺錦寺である 泉州堺梅錦寺下僧板漢此起原

滅鐘と輪廻の音也初説堺四條引接寺

打老兒丸 泉州堺神門町大道洗香屋兵衛方看板出版之、功能如字又牛房、功能如謂

高ひ三物、堺に能久の軒、親庄の賢、源光寺の煉藥

能得方の親曾長徳寺本意也

親姫子 親姫子 泉州堺 是不足言餘國、附也、泉州童謡也、幼童戯石子彈石七教等及晩景歸吾家時取葉勝負小石返故地

投之給之咒語也（○命云、このナ、クはナ、）

男無き親覺は剛ひ致帳かな 泉州堺乳守領

大阪と堺との間の道、西風の強當ること江戸五十三次にもなしと

御本といふ號版は録を取讀時の訓なり 泉州堺古馬路茶方出詞也、御本候下座讀登可申挨拶手本出也、京大阪不知語也

調御寺 泉州堺宿院町寺町在之日蓮平等殿也、佛古號一也

此の類の語はなほ澤山あるが、是等の語のあるのは著者が堺の産であつたからである。假りに子供の時分に堺を離れたとしても、親より聞かされて知つた事もあり得るが、著者自身も一度堺を離れては全く無關係と成つてしまつたと云ふのでは無く、時に堺へ赴く事もあり、自ら見聞して知つた事もあつた事だらうと思ふ。六十年前の事と今とを

比較して居る事によつても、老後の著者が塙と没交渉であつたとは考へられない。

著者は東武者小路梅屋坊に住んで居た。武者小路は烏丸と堀川との間が梅屋町（即ち東武者小路）、中武者小路町、西武者小路町の三町に別れて居り、其の烏丸の東側には武者小路と二筋南の一條との間に一條家の塙があり（今は御苑となる）梅屋町は一條家の直ぐ側であるから、一條家の家臣たる著者は此の町に住んで居たのである。

姓は川瀬、父を松庵と云つた。此の事はハの部無量壽の佛を願ふ身に松の庵に千世や経ぬらんの變行註に「父川瀬松庵重用、念佛者六十、還本并祝之孝子久貴詠」とあるによつて判る。跋文の尾に存する「川瀬氏」の印は著者の姓を示すものであつたのだ。孝子久貴の孝子は、こゝでは父存生中に使うて居るので其の意味が判りかねるが、とにかく松庵の子に久貴と云ふのが居りし事が判る。但し孝子の意味を知らないで、久貴が著者の名であるか何うかは判らない。跋の印文に「久□之印」とあり、其の第二字は印肉かすかにしてウ冠が認められる程度であるが、決して貴の字では無く何うやら寛の字であるらしいから、著者は多分久寛と云ひ、久貴に其の兄であつたかも知れない。父松庵は念佛者であつたと云ふが、本書中には「川瀬松庵重用詠」として「朝毎に旅艸の心して起よ我古邨の近くぞ成ける」と云ふ欣求淨土を詠んだと見られる歌も記されて居る。著者の狂句としてハの部に「伽羅臭い御所出の模様沽悪し東井作」と云ふのが見える。狂句と云ふよりは川柳と云ふ可きか。

著者は本書以外に謎解集と名づける謎を集めて解釋した本も書いたのであつた。即ちハの部「梅櫻藤山吹も散果て郭公鳴暮の二聲」の註に「予の謎解集出置謎也、解曰暮々也、女根云、暮音本」とある。此の書さぞかし面白いものだらうが果して今傳存して居るだらうか。

以上が本書中の記事によりて窺はれる著者の面影である。本書の増補が寛政十一・二年で終つて居るらしい事から察すると、恐らくは此の頃に著者に歿したのではあるまいか。若し此の推定が正しいとすれば、著者は七十歳前後で歿したものと想像せられる。一條家に、近衛家のやうに記録が豊富に残つて居るとすれば、一條家の公家侍乃至諸大夫の類であつたらしい著者の面影は、他日誰かにより一層明かにせられる可能性がある筈である。

本書に

入府内報といふことは今も禁中御臺所へ入來飯を^{（實）}捧む^{（實）}の故事を記す

貴顯^{（實）}○割中山殿御先代^{（實）}繫船也、依中山二字飾之、但寄冷意^{（實）}懸掛非也、此扇片面而顯骨、奉書地扇面也

花に^{（實）}添非藏人不^{（實）}見に濟む北面^{（實）}見^{（實）}同亦非^{（實）}見不^{（實）}叶

顯は假物と武家は不稱といへど公家は稱ふ

冬公家に夏陪者として^{（實）}聞きもの

公家の子と猫の兒とは何程有ても捨らぬ^{（實）}○割今左非^{（實）}是がるなり^{（實）}スダラメと訓むのだらう

お公家様の^{（實）}貧乏はお貧乏

乞食我子を^{（實）}折檻し^{（實）}云事不聞と御所の三石侍にやるぞよ

など、云ふのがあるが、著者も公家侍の一人であつた事を思ふと興味があり、後の三條殊に乞食云々は著者自身が一條家の御所侍であつたのだから、特に面白く見える。御所侍を「三石侍」と云つたと云ふが、珍しい言葉である。サゴクは扶持米の高で、下のサは侍の略では無く様の略では無からうか。

○東寺の塔の九輪の先と、中立堀川橋の振法師の先と高さ同じ

○當時江戸本傳文者京傳存濟ト云、京、自笑其頑古、西蜀等不劣

○和惣兵衛といふ話本能出来たる物なり 安永三年午年出

と云ふやうな記事も夥しくある。だから釋駁と云へば無論難駁ではあるが、其れだけ内容が豊富に成つて居るのは事實だからわれ／＼としては寧ろ有難い。しかして本書に見えた譬喩其の他には變行註で説明を施して居るものもあるが、説明の全く無いものも夥しい。殆んど無いと云つて可いやうだ。著者にしても全部の意味を知つた上で書いたのでもあるまいだらうが、著者では判つて居るものが、社會の轉變のため現在のわれ／＼には判らなくなつて居るものも夥しい事と考へると、註の無いものゝあらのは惜しい事である。

さて純粹の諺語で無いものについて一々例を舉げる譯にも行かぬが少し舉げると、時花詞の例

承知不承知 當世時花詞也別前江戸春用語

出入の商人退品に難有ござりますトハ詞、近軍一統時花、代敬詞

時花詞、有かたひ、恐れ入、大きに、不_レ用詞、貴殿、趣分

頭がよい 大坂、時花詞也、是女、聊頗_レ云。

マア能わひな 中比、時花詞、但ナヤリ語也、ソシナヤナイニ同語ナリ

善哉難是 時花詞也

故○註時花詞也、喻バ此方共我等ト云ニ用

小鯉にいちや付_レきトハ時花詞ニノシヤラツク也

と云ふりますか、時花詞也、何ンでいふてか、久しひ物じや、大きに御無沙汰

能出來た代物じや 時花詞也 恩人云

そこでそれといふ語は當世時花詞

菩薩の御影で無ければ不^レ燈^マ○菩薩米指也、近世時花詞飯炊下女菩薩云リ

炊女^マめしたき女ないふ時世詞也

めされ・めさる・被召・被食^マ中昔老人詞也、さしやる・さ

舞官とて近年時花詞、金持の大盡をいへり

先生○古師所說今下賤者時花詞用サスガニ様付難仕、又殿付留得^マ不^レ云代用之云云

古師所^マ時花詞

病づかしやつた 時花詞也

大きに御無沙汰とは當世時花詞

此の流行語に對して昔詞と云ふのもある。

頓作いふ○^マ直作トモ、昔詞也、今口合云瓢金一百也

文作いふ 昔詞也今入部云事也

章詞(即ち章語)の例

通さぬ法度、通さぬ慰慶 章詞

佛様く日の中へ後人が這入ました、鐵の柵で叩き出して下され 章詞

西六條本願寺邊章語 狀違て常樂寺、眼指て明覺寺、走て端之坊、轉て興門様、起て大門様、去て隱門様云云

お家様部様、尻がひよつくり出ました、何方ほど出ました、瓢箪ほど出ました、瓢箪の上に灸を居て、熱や毒や金佛 大坂章詞

諸語辭書體略盡に就いて(岡田)

坊様大窓は丸大町、肩に掛たる衣裾、手に持たる珠簾屋町、足に履たる雪路屋町、尻から出るは佛光寺、小便したる敷の下
夜露呼たる花嫁御、朝の座敷へ出たれば、御飯三盃、汁五盃、贈七皿、酒三升、夫に能茶を四十五服 童詞

方言に對する著者の關心の例。

方言とは國々にて唱への違ひ替る詞をいふ。東越江戸にびつこといふ、踵きびす江戸にかぐといふ、欠江戸になまくびといふ
虎竹江戸に基言といふ、ぬるひ江戸にますいといふ、子供江戸に小僧といふ、御内儀様江戸に御上様、西國にては御上様と呼
唱ふなり、大阪にては御家様といふ、又御内室を御内方ともいふに付て、室を誤り實と心得る甚非なり、女房といふ號は甚能
號なり、標中の女房官名に刻す、内女房と云云昔より女房達御達など奥女中腰元いふに同じ、攝家方にも家女房といふ號あり
京大阪などに我妻を女房共と唱ふこと過たる詞なり、唯女共といふてよかるべし、堺に女の子を女房の子といふ、大阪に女郎
といふ、京は尼といへり、これは天然の唱なり、天然は總て女を尼といへり

伊三坊吉坊等子供名ざし也

肥後大阪詞也

いちや付じな付大阪詞也

藤平京詞也大阪二體はも。ほむに云り

長である 大阪詞也あんまりであるなり

茄子は化粧の無きものゆへ青夢第三とす然近年大阪卑語無錢者茄子名譯未考

×まして江戸詞也、取込しことに用ゆ

輪にも利にもかゝらぬ者 京ハ桶ノ桶ヲ寫云り、依同心也

つし京詞あま川合詞これ體上に鈎棚也揚新

愚設の體は伊勢の名言 此言はたゞてなくこと

和泉、内儀云

走音病、贅入也、唐土にもあり如、上字也。正七十六日兩度也、大和國藤持ロクモチ親里、タマモノヲモチユク心也、惣七日宛也。

商仕地と大坂詞

舞の稽古でつん／＼じや、大坂詞也つん／＼、鼻であしらふ也

師大匠師とは大坂詞の出創なり

あんだ、○註大坂新町里詞今出来詞也或江戶古原、おいらん、類

氣絶を大坂にてはお八といへり

思案銀とは浪、友をいへり、大坂詞也浪、兩、過、銀二匁、輕

しゆつと消、大坂詞也めんぼくなくわざになまれぬことに用ゆ

撰ひ撰じや、○註大坂詞也京大智也和泉、且、也紀州、倍

撰ひ撰じや、○註大坂詞也京大智也和泉、且、也紀州、倍

不生鯛、○註京詞也一夜餘云又鯛除一、鯛云

不鯛、大坂詞也生物

魚類云

大多のこと方、いとて國々にかはれる詞なり。京は一概といふ、大坂は撰ひといひ、江戸は我意にといひ、和泉の在には大匠といひ、紀州には麻伊那といふ云云

辯舌者を江戸にて口べりとして嫌ふことなり。

おみへ、江戸女詞也京云御前、証言也

焼餅、江戸ニテ恰氣ノ女房云

諸語辭事、略略盡に就いて(岡田)

されて 江戸詞也 なされていたされての略也

味噌付るとは駄掻ことなり 江戸味噌掲ぐるト云

×に道見せな ○註江戸詞也、土方ノちんばノ事也、カヘツテ能歩トノ事、

大坂ニはしこくれ、京ニこかい、ト云、是ハにはとりのけあふなまればてか

萬八 江戸詞也 虚言ないふか

御宗ニハ八郎マンバラワ

(×篇は足、旁は念)

七

とにかく雑駁ではあるが内容は富豊である。今諺語辭書として最も優秀である藤井博士の諺語大辭典を尺度として本書の内容を檢するに諺語大辭典に見えて居るもので本書に收められて居ないのが多々ある事は云ふまでも無いが、逆に、本書に見えて居るものであつて諺語大辭典には見えないものもかなりに存する事を知る。しかして此の點こそ本書の俚諺辭書としての價值と云ふ可きであらう。よつて、イの部に範圍を限定して、本書にのみ見えると云ふものだけを列舉して見よう。但し全部を舉げる譯には行かぬし又其の必要も無いから漢籍や佛典から出たと覺しき類のものは除き、主として日本人の云ひ始めたと認められるもので面白さうなもの、しかも純粹の俚諺と云ふ可きものを採る事とした。文句は少々違つて居ても、大體似たものは是れも除く事にはしたが、(例へば本書の「朝暮九月に常月夜米の飯に菜汁」と大辭典の「イツモ月夜ニ米ノ飯」「イツモ月夜ニ常九月月夜ニ米ノ飯」と、本書の「毎事飽かぬ熊野松風に米の飯」と大辭典の「湯谷松風ニ米ノ飯」との類)云ひまはしの一寸した相違で諺語大辭典のイの部には見えすして他の部に出て居るものを氣づかないで此處に舉げたものも存するだらう。註のあるものは註も引く

何例正片^{何例正片}。

何時迄^{何時迄}の頼り掛りやる

災^災中^中者^者の入らざる間^間に京詞

急ぎの文章^{文章}は静^静に書け

色取^{色取}乃より食^食ひ取^取れ^れる^る太^太辭^辭典^典に「色^色取^取リ^リ其^其紙^紙」

色事^{色事}に錢^錢の入らぬ事^事たし

今時の色事^{色事}は添^添に付く

今道心^{今道心}三年

信^信院^院は國^國を編^編て、も格^格氣^氣する

一作^{一作}二^二面^面

一八^{一八}の誤^誤り 筆^筆者^者書^書寫^寫

一文^{一文}錢^錢は拾^拾はぬもの 離^離三^三取^取返^返放^放 (太^太辭^辭典^典に「一文^{一文}錢^錢ト親^親ノ離^離ハ取^取リニクイ」)

一文^{一文}錢^錢は拾^拾はぬもの 咒^咒呪^呪之^之具^具故^故

一文^{一文}字^字も得^得引^引かぬ者^者

一枚^{一枚}紙^紙は遣^遣らぬもの 忌^忌也^也

一代^{一代}の守^守本^本尊^尊は額^額と汁^汁 一^一休^休和^和偏^偏之^之語^語

一^一奈^奈良^良一^一伏^伏見^見三^三界^界とて助^助説^説の流^流嫌^嫌き所^所といへり

一金^{一金}二^二席^席

一字^{一字}は無^無師^師の師^師 (○[○]蘇^蘇東^東の「字^字觀^觀」事^事か)

蘇^蘇東^東諸^諸書^書類^類を總^總論^論に就^就いて(岡^岡田^田)

一越調で喚く

一人前の地震が少し

一献壽は飲まぬもの 華家用之故

一生往かず後家となる

一揆起して来た

石垣の手傳ひするやうには無し

石の吸物

石突から棟上まで咄す

石佛の懷

石臼の鐵心の脱けた如し

石となる桶も二葉の時は摘まるべし

陰堂の銀箔

意地悪の陰口ふひ

銀子満々たる大盡風 インクラハ唐笥也

狗威しの異見ではゆかず

犬法橋 似法橋也 御室令言ノ法橋也

蜘蛛群舞歩心地

茨木童子が腕取られし面 強奴之上(行奴)遇也

板倉殿職しが出た 公事×端 (×の所へは口詩に夢か書いた字が入る)

餅は恰も要衆の如し

餅や三八にして置く（○私の知つて居る老婦人がよく使つた語である。事なするのに身を入れず、よいかげんにほつておく義である）

此で餓餓る思ひ（大辭典に「飯粒ヲ餓ケル」。著者は飯粒の事であるのな、）

飯粒形な物が欲しひげな（○今は小判形の飯粒などは、田舎の舊家でも殆んど使用せないだらう）

飯粒の縁は叩かぬもの 大梵天宮ニ響き聞ユト

飯粒の底は振揺らぬもの

飯粒の蓋を以て盆となし（結核）給仕せぬもの 切腹之用

無敵將軍と出かけた 戦事也

入らぬ法師の公事工み

人小鉢ほど子が有る

星集（いんしゅう）見るやうな

伊勢清めの雨 毎年九月十八日の雨をいへり

祈れば雨を多聞る天

生る瀧死る瀧は産の道

表類三人撰（いんしゅう）縫はぬもの 内事時ノ用也縫時二人して引張合也

一癖狂へば七癖狂ふ 有職也辨官七人アリ次第ニ轉任ツ云リ（○上ノ母字）
命取とは美女、命親（いのちのま）とは悪女の異名（大辭典に「命トリ」はあり）

我で節用集見て来ふといふ覺えは不用の者なり

一に白川、二に吉祥院、三に西院とて京邊の水掛よく、しかも水掛なき田地といへり

洋語辭書は成靈に就いて（岡田）

伊勢の（イセ）小食（コシキ）に信濃の大食（オホシキ）といへり（○（信濃者ノ大成クラヒ）ハ珍）

一歩（ハツポ）くれる（ユル）遊樂（ユウラク）より小判（コハン）くれる（ユル）成上（ナゲウリ）り

形（カタ）如（ナ）を裸身（ハダカミ）で廻（マ）る

石（イシ）起（オキ）の綱（ツナ）で（ヲ）鋸（ノコ）てじや

書中所見の引用書は國書に徒然草、枕草子、伊勢物語、宇治拾遺、太平記、選集抄、姓氏錄、前太平記、今川、書言
音釋節用、童子教、倭詞、覺道圖鑑、月花餘情、忠臣藏菅原などの淨瑠璃、小野菫歌字盡、京名物集、定信の關の秋
風、大和名所圖會、攝津名所圖會、郡林泉名勝圖會、近世崎人傳、韻鏡易解、往生要集、句雙紙、水鏡、正信偈があ
り、外典には四書、老子、莊子、呂氏春秋、春秋穀梁傳、晉書、唐詩選、鶴林玉露、事文類聚、古文真寶、蒙求、内
典に法華經、三部經、金光明經、孔雀明王經、大智度論、唯識論がある。又大まかに軍書、兵書、醫書、佛書として
引くものもある。特に珍しいと云ふ程のものも無い。が是れらを全部直接に引いたとは見るに及ばぬ事は認めて可か
らう。孫引は何時も有り勝ちの事である。

最後に本書所見のもので、興味ありさうなものを抄出する。此の種の紹介では、是れが最も必要であり、例が多け
れば多い程可いのだが、實際としては多くを挙げる事は不可能である。一斑を示すに過ぎない。むろん諺語大辭典に
見えないものに限る。大辭典に見えるもので此所にも挙げるのは特に注意すべきものに限る。

宴（ウツ）の行水（ユキスイ）で臂（ウデ）が無い（ナシ）（湯取が無い）

天狗の辭末（ジマツ）で負債（シヤク）み（ミ）（嵐氣餘計）

折檻はかいて三年、かゝいで三年、かぶ三年。○前九年引しらふものと、元小新と肥前ノ國ニ始渡（だからヒセンと云ふと解するもの）の如くだが何うか。元祿の合類大節用集に皮綴（もろぞう）肥前（あへまへ）とあり、今の權威ある辭書も普通は皮綴の字を書き字音讀であるとして居るやうだが、大言海には「皮綴の音カ、或ハ云フ、肥前新ノ義、肥前國島原ヨリ邪法ノ流布をシシ、傳染ニ譬ヘテ云フト」とある。カサはもとより皮府病だのに、皮綴と特に皮の字を添へると云ふのも判らぬ。肥前説も首肯できぬ。

○割註。○長宗不願寺願上人ノ返、肥州寫ノ。此の上方便については懸念の詭とする説（松井博士國語辭典、大言海）權輿又は懸念の詭とする説（増補權輿を否定する説（男重寶記は權輿説である）などがあるが未だに首肯できる説もない。此の

題如説の如きはこれを信せないのだが參考に擧げるまである。信長記に果して斯う云ふ説事があるのだらうか。國民を庫本で一寸探したが見當らぬ。序ながら、去年七十二で没した老婦人が思ひがけないと云ふ場合によくケギリが無いと云つて居た、此のケギリが又ケンニヨと關係あるものでは無からうか。

越前の皮被（かわかぶり）といふことは殿の夾箱（かばこ）の覆をいへり。（大津細の替唄に「前のものは越前家の大きな皮かぶり」、風來山人の猿轢（さるがし）逸傳に「かりたかあれば越前あり」越前と云ふ隠語は珍らしくは無い筈であるが俚言集覽にも見えない。序ながら武鑑で見る越前

家の挟箱は大して形が似ても居ないやうだ）

秋稻妻少きは稻不作する。○註。電光を稻妻と訓ずるは此因縁なり、稻の殿ともいふ。

狸陰（ねこかげ）百貫（ももぐわん）裸百貫なら普通である、口丹波地方に「狸一本魔羅一本」と云ふ語がある）

土井の火車、阿部地獄（神形迫也（兩侯は貧乏で有名であつたか）

高祖塞がり極漠然がり

甘草子じや

等は手渡しせぬもの（中略）

仲人の諍（しやう）冷し

（諸語雜書管燈臺に就いて（岡田）

思ひ出し子おもひだしこ

頼朝果報とて居ながら天下取るをいふ

勢せう排はい突つで出れば取らるゝ

唯居ただゐせふより除ときめ

髪は黒髪くろかみ若わかき時とき光ひかり多おほし老おいて 髪かみは黒髪くろかみ若わかき時とき光ひかり少おほし老おいて

河豚汁かふろじゆを食くひ毒どくに中なて死ししたる武士は名跡改易せらる

加賀殿の膳肉かかどのてんにく ○註 賀州太守來古刻以創服傷肉爲膳肉かかどのてんにく、小身客諸侯歸館後面學之、家司諫之、主人勃然而怒之云云

豆腐とうふの煮にても知らずして普通は字である

唐たうへ我われ愈い小松内府重盛公爲之（下の條、此の語は語源大辭典カの條にも見えるが、重盛の故事は見えぬから擧げた。）

狐きつねの最期さいご 狐きつねの最期さいご 狐きつねの最期さいご

娘むすめの女おんな兒こは果報ありと希まれナ物也（メの條に）女おんな兒こ産うめば仕合が徳とくひともある、今は若生觀とて恥ぢる）

天神てんじんの氏うぢ千ちは陰謀いんぼうなり 似に指さひがむこと

鳩うずは珠たま數かずかけ出で廻まわは裂されかく（何の事か判らぬ）

日本にっぽんは棒ぼう三本で治まり切つた 佛法ぶつぽうト鐵炮てつぱうト

年越としこの夜よはXエなと抱かかいて寝ねるもの（Xは木篇にソ天を旁とした字）

井伊いゑの節ふし ○註 此語井伊掃部頭殿、大樹公御座胞衣纏はらひ竹上例也、此數一里四方、彦根領有之云云（綴切也、親如此引也）

雨あめ垂たじや 背高女也

書出しゅしゅ者ものとて節ふしに藥何服代何拾文と取に來る

さて此の珍らしい書は、龍谷大學の國文學研究室の藏本にして大正十五年十一月に購入せられたものである。かつて

昭和八年末頃であつたが古典全集第五期の刊行が計畫せられ、收載書に就き正宗氏より御相談を受けた時、私は此の珍書をも候補書として挙げ、石川教授も雕刻を快諾せられたのであつたが、謄寫の費用の點で謄寫が出来ず、刊行も不可能となつてしまつたと云ふやうな事情もある。そこで、せめて解説だけなりともして置きたいと思ひ其の頃調べたのだが、其の後まだ紹介もせられては居ない様子であるから、今度思ひ立ちて以前の備忘を土臺として此所に解説を物した次第である。他日此の書が雕刻せらるれば幸甚である。

八

諺語辭書たる擬々噺を紹介したるに因み、金言、格言、俚諺、擬々噺、俗説などを蒐めたもので、辭書體であるものを參考までに氣ついた限り挙げて置く。範圍は徳川期末までに限る。擬々辭書の専書で無いものも便宜上挙げた。

管蠡抄 修身治國平天下に役立つ金言要語を漢籍より出典を示しつゝ、採蒐し、君臣・政事・文學・武備・禮法などの十三類に分類した意義分類體金言辭書と云ふ可きもの、著者は菅公だなどと傳へられて居るが、誤にて金澤文庫本を轉寫した本に存する貞顯の識語により、菅原爲長である事は明らかだ。今は十卷又は五卷と成つて居るが、後法興院政家記に上下とあり、金澤文庫本の寫しは四冊本の零本らしいから、元來は二卷本で、それが四冊ともなり、後には十冊とも五冊とも成つたものと見える。市野迷庵の藏書目に古鈔八卷本が見えるが、零本で無いとすれば四冊がさらに八冊と成つたものらしい。古活字本や、林道春の片假名註本(寛文十一年四月刊)がある。後者の後摺本に博覽古言とあるは書肆のさかしらである。

金句集 寫一卷 著者時代不詳

漢籍中の金言名句を典故を示して漢文のまゝで挙げ、帝王事、臣下事、學業事、文武事、父子事、儉身事、祭元事、政道事と云ふ風に八類に意義分類したもので、全く竹蠹抄を簡單にしたやうなものである。久原文庫本本文僅か十一丁、一頁七行東北帝大本、村岡典嗣氏本などがあるが、夫れ／＼多少の出入がある。此の金句集の影響で出来たのが耶蘇會の天草版金句集である。

天草版金句集 一卷 世界的に珍らしい吉利支丹版として有名である、文祿二年に九州の天草學林で刊行せられ口譯平家物語、伊曾保物語と合綴せられて居る「四書七書などのうちより抜きいだし金句集となすものなり大方それぞれに註するものなり」とある。主として漢籍所見の金句二百八十二をa b c順に舉げて國語で註釋したもの、日本人の云ひ出した謠は全く見えない、羅馬字書ローマ字書である。四十七頁。索引の金言集としては本書が嚆矢であらう。さて天草版金句集が上記の金句集の模倣である事は、書名の一致や兩書に見える共通の句の比較から云へる事であるが、大體東北大學本や村岡本の方に據つたものらしいと云ふ。

句雙紙

禪林で慣用せられる特有の言辭や成句を一字二字三字と云ふ風に單に字數で分類しただけで後は雜然と並べたもので其の言辭や成句は主として佛典や語錄所見のものが中には外典より出て居る成句もある。何れも修行の用心と成る可きものであるから本書に禪林用金言集とも云ふ可きである。從うて金言名句集としては偏したものはあるが、其の金言名句の中にほかなり世俗的に成つたものも無いで無い。さて此の種のは、恐らくは自然に羅馬字偏などの

諸語談話集（野東俗談の事、諸草の類）があるが、遺漏もあるからと云ふので、千五百七十條を色葉類聚して、引用書九百三十餘部を引きて解釋したもの、各部の中で「諺」と「俗語」とに分けて居るのは全く諺草の模倣である。長秀には俗説辨や漢字和訓の如き啓蒙の著もある。

伊呂波故事 五册 信更生撰

寶曆四年（一七八五）の昔語目録の故事並雜書の部に見えらるもので未見ながら書名から見ると色葉類聚故事辭書のやうだから舉げるのである。

俚諺拾遺 寫本五卷 石田玉淵 寶曆六年白序

神祇・釋教・氣形・奇水・奇石・草木・舊蹟などに分類したものと云ふ。未見、國書解題による。

國字綴求 十二卷四本 美談 伊東節（右隣）

安永四年上巳日
他序同九月刊

意義分類式故事辭書と云ふ可きで、分類は天文・地理・人事・飲食・文藝・器玩と云ふやうな分類である、解釋は片假字文、出典を明示して居るが、國書は無いやうである。

和漢俚諺便覽集 寫一卷 麗水金啓明 天明丙午三月

和漢の諺語を天文・地内・宮屋・時候・人倫・身體・衣服・氣形・生植・飲食・器財等の部門に類聚し解釋を施して居ると云ふ、一〇・丁

學苑昭和十
年十一月號

日本俗諺集 寫 七十三丁 時代不詳

色葉類聚にて解釋入り、輪池叢書三〇の中

學苑昭和十
年十一月號

皇朝噺林 寫 美濃型 一卷 清水濱臣 年代不詳

五十音類聚で尾に「引書目」あり、五十七書を挙げ居り、支那の書もある。序跋は無い。濱野知三郎氏が大正三年十月廿四日に寫された新寫本を所藏して居られる。書名の如く主として比喩を擧げて居る。一頁十二行四十丁。

俚言集覽 寫 二十四冊 美濃型

本書も俚語の專書では無いが、語を擧げる事が多いから（解釋は殆んど無い）こゝにも數へたまでの事である。分類はアカサタナ

ハマヤラソ・イキシナニヒミイリナ……式である。鎌刻の俚言集覽は普通の五十音分類であるから、鎌刻本で元の組織を知る事は出来ない。書名も「語因」と云ふのが本の名であつたやうだ。著者は村田了阿だと云はれて居るが、然うでは無く、太田全齋の著に「阿や移山など、云ふ人の手が加はつたのでは無いかと思はれる。唯一の全齋自筆本は帝國圖書館にある。

國字分類語 寫 二冊

上卷三十一丁、下卷三十九丁、色葉類聚、解釋は無い。白紙や空白のあり著者自筆稿本であるが、題箋に「椎岡稿本」とある。椎岡は峰屋茂橘として天保年中の人であると云ふ。佐々木信綱博士藏本。

（昭和十三年一月七日稿）